黒人研究学会会報

Japan Black Studies Association Newsletter No.88 (September 30, 2019)

第88号　2019年9月30日

例会発表要旨

4月例会　2019年4月20日　龍谷大学 深草キャンパス

①「アンソロジー Negro 概観―ハーレム・ルネッサンスの一考察」

小林 亜由美（京都大学・院）

1934 年、黒人文化を称賛するアンソロジーとして、イギリス白人女性 Nancy Cunard によって編纂された *Negro* が出版された。出版当時、すでに、アフリカ系アメリカ人の歴史について述べた *The Negro*（W.E.B. DuBois 著、1915 年出版）や雑誌 *The Crisis* が存在しており、アンソロジー*Negro* はあまり評価の対象になることはなかった。しかし、このアンソロジーには、Alain Locke、Countee Cullen、Langston Hughes、Zora Neale Hurston といった、ハーレム・ルネッサンスを代表する黒人作家からのエッセイが収められており、また、Michael Gold、Theodore Dreiser、William Carlos Williams といった白人作家たちによる寄稿も全体の3分の1を占める。

本発表では、まず、アンソロジー*Negro* について、汽船会社 Cunard Line の曾孫である Nancy Cunard の経歴をふまえながら、アンソロジーの編纂に至る経緯を紹介した。そして、Cunard が資料収集のために訪れた、ハーレムでの経験を、Cunard のエッセイ "Harlem Reviewed" と、同行者の Henry Crowder のメモワール *As Wonderful as All That?* とを照らし合わせて検証した。さらに、アンソロジー*Negro* への寄稿者のエッセイの紹介として、Hurston と Dreiser のエッセイを取り上げ、それぞれの小説作品への影響の可能性を指摘した。最後に、*Negro* が他の黒人文化に関する出版物とは異なる特徴を有し、寄稿者の小説作品の新たな解釈を可能にすることを確認した。

② *Jonah's Gourd Vine*: John の自己喪失

古谷 やす子（立命館大学・院）

Zora Neale Hurston (1891-1960) の最初の長編小説『ヨナの瓢箪の木』(以後『ヨナ』)を「John の自己喪失」というテーマで読み解く。Hurston は Franz Boas のもとで文化人類学を学び、「人間の知能は人種には拠らない」ことを学ぶ。その後、Hurston はフォークテイルを収集しながら黒人の生活を観察し、人間に普遍的なものを見つけ、それを作品に著した。三回の結婚というモチーフがこの作品および『彼らの目は神を見ていた』(以後『彼らの目』) に用いられていることに注目すると、『ヨナ』の主人公 John は三回の結婚のあと事故死し、『彼らの目』の主人公 Janie は平安の境地に達する。John の三回の結婚を精察すると、最初の妻 Lucy が律儀で全てを采配したため John は自分で考えなくなり、Lucy の考えを自分のものと勘違いする。死に際の Lucy の視線に恐怖を感じるが、怖がる自己を見過ごす。二番目の妻 Hattie とは共に享楽に耽り、堕落を咎める周囲の目に後悔を感じるものの、Hattie に責任を課し後悔している自己に気づけない。三番目の妻 Sally は裕福で、John は彼女に頼れば安心と思う矢先に若い女性に誘惑され、そのとき初めて Sally を騙そうとしている自分の存在に気づく。今まで気づかなかった自己の存在に戸惑い混乱し考え込むうち、彼の運転する車は汽車にぶつかり彼は死ぬ。以上の考察により、John は自己の存在を認識できず自己を構築できなかったことがわかる。彼は自立できなかったために生きられなかったのである。この作品は、平穏な生活こそ自由であり、恐怖や後悔は我々を混沌へと導く自由の限界を示すものだと主張し、人間とは何かを探求する Hurston の作品の出発点を飾る。

③ Grasshopper children and low, sticky farts: On the "Exquisite Language" of Cynthia Bond's Ruby

Kathleen Yamane (Nara University)

Bond's critically-acclaimed debut novel, *Ruby*, was published in 2014 as the first volume of a trilogy. The story centers on protagonist Ruby Bell's struggle to survive against abuse and on her relationship with Ephram Jennings, a supermarket bagboy who has loved her since childhood. Ruby leaves the oppressive brutality of rural Texas for New York City where in spite of new opportunities to enjoy jazz bars and a satisfying lesbian relationship, she continues to be victimized. Returning home, she confronts the haunting nightmares of her younger years, and begins her descent to madness.

The novel received praise for its "luminous prose" and "exquisite language", but was also criticized for its graphic scenes of physical, mental and sexual abuse, including Ruby's own vicious defiling at the age of five. This study explores Bond's manipulation of language within the novel. Specifically, the presenter aims to tease out the linguistic processes and rhetorical devices that Bond uses to create this "exquisite language" and then to consider the effects.

It was found that the author makes frequent use of functional shifts involving nouns used as verbs (*the swallows freckled the sky; "Battle Hymn of the Republic" syruped its way through the kitchen)*, as well as juxtaposing two nouns with the first functioning

adjectivally (*grasshopper children; bone arms*), both processes resulting in unconventional and vivid images. Bond also utilizes relatively rare shifts involving nominalized adjectives (*the lonely, the empty*), the grammatical dissonance serving to distill and intensify the quality named. Personification of body parts and natural elements (*Ruby's hair speaking to Ephram*; *the sky rolling thunder*) were found to reinforce Ruby's ability to disassociate her body and mind and to create an environment in which the moon, sun and other natural forces are more characters than background, witnesses to all that happens. Furthermore, Bond's effective use of salient black modes of discourse such as hyperbole (*She was so black she was almost blue*) and signifyin' (*Man, you so old if I told you to act your age you'd be in the grave)* serve to ground the speakers. Through these devices and others, Bond has succeeded in creating vibrant, multi-dimensional characters who inspire empathy and compel us to listen to their stories.

会員からの投稿

サンコーファ、あるいは温故知新

木内 徹

今年の黒人研究学会（以下、黒人研と略す）年次大会は 2019 年 6 月 22 日、23 日に立命館大学衣笠キャンパスで行われた。私は、この会場に姿勢正しく、みじろぎもしない若い女性が座って真剣にそれぞれの研究発表を聞いていらっしゃるのに気づいた。いままで一度も会った記憶がないので声をかけてみた。すると、同志社女子大学大学院博士課程で英語教育を専門とする大学院生だという。目がご不自由のようで、私も初めて見た機械だったがブレイルメモという小さな機械を使って、発表内容のメモを取っておられた。

さらに詳しく話を聞くと、この若い女性は、なんと和田フミ子さんの姪御さんだという。また、和田さんが存命中に持っておられた黒人研会報や関係書籍も保管しているという。そこで大伯母である和田さんゆかりのこの学会がどのようなところなのか、見学に来たというのだ。私は、これを聞いて 40 年ほど前の 1978 年に黒人研に私自身が入会した頃のことをまざまざと思い出した。和田さんはかつて長いあいだ黒人研の会計係をしてくださっていた方である。私が入会したとき和田さんを通じて入会の事務手続きをしたのだった。私の年齢はちょうどこの和田さんの姪御さんと同じくらいの年齢で、まだ二十代の大学院生だった。和田さんはまだ 50 代だったと記憶している。

和田さんは地味な会計係を黙々とやっていらして、私がまだ駆け出しの若造であったにもかかわらず、親しく話しかけていただいたことを覚えている。当時の黒人研は、大会も例会も関西で開くことが多く、和田さんとは一年に一度か二度ほどしかお会いしなかった。しかし、黒人研の大会や例会に行くといつも忙しく会計の仕事をされていた。

私がその姪御さんと話しているところへ、私よりもさらに入会時期が早い、北海道の元国学院短期大学教授・寺山佳代子氏が話に加わり、和田さんは旅行好きで北海道の寺山氏の家にも釧路旅行の途次に泊まったことがあるという話をした。また寺山氏によれば、私はま

ったく知らなかったのだが、和田さんはアフリカーンス語（南アフリカ共和国の公用語）の研究もしておられたとのことで、その辞書もお持ちだったらしい。

その後、私は、和田さんとたいしたお付き合いもないまま、いまから 13 年前に「黒人研究学会会報」第 64 号（2006 年 12 月 31 日） の「消息欄」に、和田さんのお名前があることに気づいたが、そこに詳しい動静は書かれていなかった。いま思えば会報係の会員が和田さんが入院のため黒人研に出席もままならなくなったので退会されたことだけを記載したということだったのだろう。

さらに、9 年前、いまもご健在の黒人研創立メンバーのおひとりである赤松光雄氏による「和田フミ子さん、さようなら」という追悼文が、「黒人研究学会会報」第 71 号（2010 年 6 月発行）に掲載された。私はこれによって和田さんが 9 年前の 2010 年 3 月 31 日に亡くなったことを知った。この追悼文には、和田さんは亡くなる前に大阪府北部の池田市にある老人ホームにいらっしゃって、「あれほど精勤に月例会に参加していた和田さんが顔を見せなくなって半年以上もたっていた。舌がんの手術をしたということだった」とある。

和田さんは、この追悼文によると、神戸市外国語大学の前身である神戸外国語専門学校のご出身で、赤松氏と同窓だったという。赤松氏も「その会計係を和田さんが進んで一手に引き受け、以来殆ど倒れるまで、会計は和田さんの独占だった」と書かれている。神戸市外国語大学は同窓会が「楠ヶ丘会」という名で、同大正門を入ると最初に楠ヶ丘会館という会議用の建物があり、ここで黒人研の例会がたびたびおこなわれた。同窓会誌名も『楠ヶ丘』といい、和田さんが旅行好きだったことは、和田さんが若いころ書いた「旅の思い出から－襟裳岬・足摺岬のことなど」、神戸市外国語大学会誌『楠ヶ丘』第 4 号（1959 年）などでわかると、これも古い会員から聞いた。

私が黒人研に入会した 40 年前、私はまだ 20 代で、和田さんは五十代であり、現在の私より若かった。和田さんの姪御さんはまだこの世に生を受けるはるか前だった。40 年前の 1978 年といえば、日本では黒人文学をニグロ文学と言う人があり、まだアメリカ合衆国でさえも黒人研究という学問が本格的に開始されておらず、社会的にはコピー機もなく、東芝が世界初の日本語ワードプロセッサを作ったばかりだった。それから四十年が過ぎ去って、和田さんは亡くなり、和田さんの姪御さんがその当時の私の年齢で、私はその当時の和田さんよりはるかに年を加えている。現代は日本で開催された黒人研のような学会でも海外から盛んに参加でき、私も年に十回も海外の学会で誘われるまま発表し、一度はインターネットの発達によってコンピューターのソフトであるスカイプで日本にいながらにして海外の学会で発表したこともある。

そのようなことを考えながら、今年の黒人研年次大会の研究発表を聞いていたのだが、そのいくつかの発表者のなかで、カリフォルニアのグロスモント大学(Grossmont College)で長く教えていた私の友人テレーザ・フォード(Theresa Ford)氏が、その発表「黒人／アフリカ系アメリカ人女性による文学教授方法の紹介」(“Introducing an Introduction to Teaching Literature Written by Black/African American Women”)のなかで、アフリカのアカン系の言葉である「サンコーファ」(Sankofa)という概念を使って説明された。この概念は、西洋のモダニズムにとらわれることなく、アフリカ古来の遺産である伝統文化を直視して、なおかつ現在の日々を記憶として作り上げるというものであり、ガーナ独立時のスローガンでもある。これは日本の故事「温故知新」にも通じ、私がこのときぼんやり考えていたことをまさに体現する概念だと思った。

40 年という歳月は世界を想像もできないほど変えてしまう。これから 40 年後には、私は跡形もなく消え去り、この姪御さんがいまの私のような老齢になる。世の中は、そして黒人研は

どうなっていることだろうか。黒人研大会が終わり、私はそのようなことを胸に抱いて京都から東京へ戻った。

歌詞を研究してきて思うこと

ウェルズ　恵子（立命館大学）

私は、アメリカ文学研究者として歌詞と音楽文化を研究するという（多分、多少）脱線したことをやってきました。これまでに、カントリー、ポピュラー、黒人霊歌、讃美歌、ブルーズ、ゴスペル、ニュー・フォーク、各国民謡、日本の中世歌謡などを少しづつ勉強しました。最近は、ミュージカルの歌詞にも取り組み始めたところです。そうした中で、特定のジャンルに関する専門家にならなかった（なれなかった）のはなぜなのだろうと、考えることがあります。私がどれかのジャンルに心酔して研究を始めたわけではないのが理由のひとつとして思いつくのですが、そのほかに、それぞれのジャンルがその音楽に集う人々の共同体の目印（耳印）というか、「私はあなたの仲間だ」という記号になっていることが、私を引き留めたように思います。つまり私は、その記号が宣言する声の大きさにひるんで、一つだけのジャンルを自分のものとして選びきれなかったのだなあと思うのです。

アメリカ人に「カントリー・ミュージックが好きだ」と言うと、あるカラーの人々が仲間だと思ってくれますし、「ブルーズをよく聴く」と言うと別のカラーの人々が親しくしてくれます。「黒人霊歌が好き」と言った時と、「讃美歌を聴く」と言った時は、キリスト教徒だと推察されると同時に、「黒人霊歌」と「讃美歌」とでは、異なる宗派の教会をイメージされます。それぞれがどういうグループの人々を代表する音楽なのかは、ステレオタイプ的なラベル貼りになりかねる上、一般化は容易にできないのですけれども、特定の音楽ジャンルが仲間意識を強固にするツールとして積極的に使われると感じています。

今年の夏はニューヨークで *Oklahoma!* の公演を観ました。リバイバル作で 2019 年のトニー賞を獲得した作品です。Rodgers & Hammerstein II の代表作の一つで、初演が 1943 年。映画版（1955）を観ると保守アメリカの面目躍如たる作品かと思ってしまいますが、演出によって暴力や疎外への批判も表現できる名作です。リバイバル版はむしろそうした社会批判を現代的に盛り込んだもので、Laurey 役にはアフリカ系アメリカ人を片親にもつ Rebecca Naomi Jones を起用するなど、制作側の工夫が見えやすい作品でした。他方、ブロードウェイに集まっていた聴衆の 90% は、郷愁に惹きつけられてきた人々だと見受けられました。事実、ガーシュウィン劇場の内壁はライフル銃で飾られていて、開幕前の雰囲気は、バンジョー、ギター、フィドルが盛り上げるカントリーフェアのワクワク感でした。休憩時間にはチリビーンズのスープがふるまわれました。楽しさとともに、聴衆の雰囲気と制作側の意識とブロードウェイという大衆的市場の微妙なバランスを感じた三時間でした。

私の研究対象が特定したジャンルの歌詞に集中しなかった理由のもうひとつは、研究者として、あるジャンルのファンの網に入るのが怖かったから、ともいえます。どちらかというと、私は、どのグループとも少しの距離を保っていたかったです。そうこうするうちに、音楽共同体マップ（地域別・世代別・人種文化別 etc.）がなんとなく見えてきたように思います。そして、日本にもアメリカ音楽共同体分布があるやに思います。（なんとなく、ですが。）研究者としてそ

の全体をいつも感じていたいという気持ちが、私にはあります。

音楽文化の研究を始めた頃、情報提供してくれる人たちがとても親切で、結婚式をはじめとする家族の行事に招待していただくこともありました。各地で出会った人々との繋がりは、今でも私の宝です。他方、私が仲間になりきらないと感じたときの人々の微妙な落胆は、宗教勧誘者の落胆に似た表情を示すことさえあり、私自身の立場の提示がいかに大事かを痛感したりもしました。そうした経験の後で、私はむしろ、なるべく広くむらなく、できるだけ〈全部〉をめざして関わりを持とうと思うようになりました。でもそうすると、中途半端で孤独な気分がつきまといます。それで、私はいつも「自分は、大丈夫かなあ」と不安です。

人々が日常で愛してやまない音楽（ヴァナキュラー音楽）は、同類を引きつける香水のようなものです。それを愛でて回っている私自身の香りとは、いったいどんな変種なのだろうと訝しく思います。願わくば、軽やかな芳香でありますことを・・・。歌詞の研究はどこまでも不安なので、なおのこと、そう願って止みません。

2019 年度春学期の在外研究中に3週間滞在したコソボの首都プリシュティナ旧市街。アルバニア語文化圏は口承叙事詩研究のメッカで、興味深い民話や民謡も数多いが、アルバニア語の作品にアプローチするのはハードルが高い。プリシュティナでは紛争後の復興が進んでいるものの、大気汚染や交通渋滞などの問題も数々発生している。

入　会　者

氏名：Michael Furmanovsky
所属：Ryukoku University. Faculty of International Studies
自己紹介文：I was born in Zimbabwe and received my MA and C.Phil at UCLA where I was a research assistant in the Marcus Garvey Papers Project. I wrote several hundred annotations for the first 3 volumes on many aspects of African American radicalism in the early 1920s. Since coming to Japan in 1990, I have worked mostly in the field of post-war Japanese popular culture focusing on the ways in which American and British pop music was interpreted and adapted by Japanese artists between 1950-70. My articles focus on country, jazz, rokabiri and pop music and include discussions of African-American influences on Japanese artists. My teaching is mostly in the area of movies, fashion and music and gives considerable attention to the interaction and interplay of African-American, Jewish-American and Italian-Americans in creating post-war popular culture in the English speaking world.

氏名：西原　潤（にしはら　じゅん）
所属：外務省
自己紹介文：古き黒人音楽の歴史から現代の若者黒人の音楽に至るまで，奴隷制度から現代若者黒人の文化・遊びまで，そういったものをテーマにしております。また，黒人英語(Ebonics)の構造・音声学に興味があります。HBCU　等で見せる黒人が生み出すリズム感やウネり。アメリカには「Once you go black, you can never go back.（一度ブラックにハマれば，二度と元へは戻れない）」というジョークがありますが，その名言のとおり，いつの間にかブラックミュージックばかりを聴いて育ちました。「黒人の音」の方面から，なんらかの貢献ができれば幸いです。宜しくお願い申し上げます。

（順不同）

退　会　者

氏名：要　弘（かなめ　ひろし）

編集後記

暑さの厳しい京都でも朝夕は随分と過ごしやすくなるこの時期は、もうすぐ始まる秋学期の準備をするとともに、９月末発行の『会報』の編集の最終作業を行う時期でもある。この時期は毎回半年間を振り返るのが私の中で恒例になっている。今回の振り返りの際に頭に浮かんだのは、例会発表でのハーレム・ルネッサンス関連の発表２本についてである。これらの発表を思い返してみて、２０世紀初頭の文学ないし文化研究にはまだまだ多くの可能性が残されているという感想を持った。もちろん私の個人的な関心が１９世紀後半から２０世紀初頭のアメリカ社会とさまざまの人間との関わりにあるためなのだが。

社会や人間との関わりという意味では、「会員からの投稿」に寄せられた２本のエッセイにも考えさせられる。木内先生の「サンコーファ、あるいは温故知新」は本会の歴史、ウェルズ先生には「歌詞を研究してきて思うこと」として研究活動の視点から、それぞれお忙しい中ご寄稿ただいた。奇しくもどちらのエッセイも他者との繋がりに関わる内容となっている。常に他者を意識し自らの立ち位置を決める。至極当たり前のことであるが、他者と自己の関係について改めて考えさせられた。

こうして振り返るたびに半年間でここには記せない程多くのことを経験してきたのだと実感するが、今年は一年が経過したような気分である。例会や年次大会への参加もそうだが、加えてこの夏にアメリカへ調査に行ってきたことが大きいのかもしれない。普段の生活空間とは違う場所での時間は濃密に経過していくように思われる。詳しいことは、可能であれば次号で報告をしたい。

（猪熊　慶祐）

＜編集＞　黒人研究学会・編集部
〒603－8577　京都市北区等持院北町 56-1
立命館大学文学部・坂下史子研究室気付

＜編集者＞　猪熊　慶祐
gr0313sp(a)ed.ritsumei.ac.jp
ホーム・ページアドレス
https://kmmtshuji.wixsite.com/jbsa